Takeoka, Masao, 1919-

竹岡正夫著

伊勢物語全評釈

古注釈十一種集成

株式会社 右文書院

く苦しくおばゆるがあまりに下の句はいへり。

【よしや】 ▽**とはぬもつらし問ふもうるさし** 此「うるさし」を古本に「愁」の字も て義をしらせしには言の意は明らか也。或人、是はうれはしの義といひ、又ある人は心せばしと云意を約めたる也といへり。されど翁は此比よりの語にて古言にあらずといはれたるをおもへば、解がたきもの也。又源氏物語に「うるせき」といひて喜しき意に用ひしも同じくこゝろえがたき語也。いづれ此比よりの俗言なるべし。

【新釈】 ▽**むかしむざしなる男…くるしとかきて** これは男よりおこせたる文の中にむねとある詞をとり出て、いさゝかかける也。「きこゆればはづかし」といふは、あづまにて又女をえたる事をほのめかしていひまぎらはしたる詞なり。「聞えねばくるし」と云は、京の女とははじめより又なくおもひかはしたる中なればはづかしとてひたぶるにこめていはねば、心のへだてあるやうにてくるしと云意也。よき人がらならずや。ものゝあはれしりてなさけふかき人はげにさやうのものにて、此物語のおかしくすぐれたる所なり。これをまねびて明石巻に、紫上におくりたまへる源氏ノ君の文の中に「又あやしう、ものはかなき夢をこそ見侍しか。かうきこゆるとはずがたりにへだてなき心のほどはおぼしあはせよ」とかけり。これは明石上にあひたまへる事をほのめかしたまへるにて、心ばへおなじ。▽**うはがきに…みやこより女** 蜻蛉日記に「うはぶみに西山より」とあるを思ふに、これはむざしよりとかくべきを、そなたをのみかけておもふと云心をこめて、「むざし鐙」と風流にかける也。むざし鐙は名物にて、信濃まゆみ・讃岐円座のたぐひ也。さて、おともせずなりぬるは、京とゐなかの文のかよひ、昔は今の世のやうにたやすからねば、おもひながら久しくえおとづれせざりしなるべし。▽**むざしあぶみ…うるさし** 鐙はかくるものゆゑに「かけてたのむには」といはんために「むざしあぶみ」とはいへる也。「さすがに」と云詞を中にへだてたるはひとつの格也と古意にいはれたるがごとし。「うるさし」は、あるをいとふやうの意にいへり。物語ぶみにあまたある詞にて、みなさやう也。「愁」の字の意にはあらず。古意の説ひがことなり。一首の意は、都あづまとへだゝりて久しくわかれをり。又あだし心のおはするやうなれど、ありしちぎりを思へば、さすがにかけてたのみにするには、たえておとづれたまはぬもつらし、又とひたまふにつけては、こと女にかよひ給ふよしをきけば、その事のいとはれもすると云意也。〇第三句、真本に「思ふには」とあるはわろし。他本みな「たのむには」とありて、こゝによくかなへり。「たのむ」は俗語に、たのみにするこゝろ也。▽**とあるを…こゝちしける** 京の女の文の中に此哥のあるを見て、さぞ女の心ぼそくおもふらんと思ひやられて、かなしさのたへがたき心ちする也。▽**とへばいふ…しぬらん** とひてへだてなくいへば、うるさしといひ、又とはねば、つらしといへば、恋しぬるよりほかにいかにともせんかたなし。人のこひしぬるといふは、かゝる時にやあらんと云意也。

むかし、男、みちのくにゝすゞろにゆきいたりにけり。そこなる女、京のひとはめづらかにやおぼえけん、せちにおもへる心なんありける。さて、かの女、

中〳〵に恋にしなずは　桑子蚕也
入万葉　くはこにぞなるべか
りける　たまのをばかり

うたさへぞひなびたりける。さすがにあはれとやおもひけん、いきて、ねにけり。夜ふかくいでにければ、女、

夜もあけば　東国之習家ヲ「クダ」ト云家鶏也
きつにはめなて　くだかけの
まだきになきて　せなをやりつる

といへるに、おとこ、「京へなんまかる」とて、

くりはらのあれはの松の　人ならば

訳　昔、男が、陸奥の国に、どこという目当てもなく行き着きました。そこにいる女が、京の人は見たこともなく、すてきに思われたのでしょうか、心底から思っている心があったのでありました。

さて、かの女が、なまじっか中途半端に、こんなに恋のために死なずにいては、蚕になったほうがよさそうだったなあ、ほんのちょっとの間でも——人柄のみならず、歌までこんなに田舎めいていました。そうはいうものの（男は、自分を恋い慕うこの女の心を）あわれと同情したのでしょうか、ついに女のもとに行って一緒に寝ました。夜深く（女の家を）出ていったものですから、女は、

夜も明けたら、狐に食わせてやろうっと（水桶に突っこんでやろうっと）、笛吹き鶏が、夜も明けていないうちから早々と鳴いて、ほら、こんなに、いとしの君を帰らせちゃったこと！

と言っている、（そんな女）に、男は、「京へやらせていただきます」と言って、

栗原の「あねは（娘さん）」という名のついたあの、松が、名の通り仮に人であったなら、都の土産に

㉖みやこのつとにいざといは㉗ましを
といへりければ、㉘よろこぼひて、「㉙おもひけらし」と
㉚ぞいひをりける。

校

①むかし―昔〔塗〕。②おとこ―男〔塗〕。③**ゆき**―ナシ〔塗〕。④ひとは―人は〔静・東〕・人をは〔塗〕。⑤めづらかにやーめづらやかにか〔塗〕。⑥おほえけんーおほえけむ〔静・東〕・**おもひ**けん〔塗〕。⑦おもへるーおもゑる〔塗〕。⑧心なんー心なむ〔静・東〕・**けしき**なむ〔塗〕。⑨ありー有〔東〕・**み**へ〔塗〕。⑩**かの**女ーをむな〔塗〕。⑪入万葉ーナシ〔静・塗〕・万二〔東〕。⑫中〳〵にーなか〳〵に〔静・東・塗〕。⑬恋ーこひ〔静・東・塗〕。⑭桑子蚕也ー桑子也〔静・東〕・4字トモナシ〔塗〕。⑮ひなひたりけるーひか**めり**ける〔塗〕。⑯おもひけんーおもひけむ〔静〕・思けむ〔東〕。⑰夜ーよ〔塗〕。⑱夜ーよ〔塗〕。⑲つるーつる万葉云かけのたれお〔静〕。⑳いへるにーいひ**ける**〔塗〕。㉑おとこー男〔塗〕。㉒なんーなむ〔静・東・塗〕。㉓わ一本ーナシ〔静・東・塗〕。㉔あれはーあれは〔静〕・あねは〔東〕・あねは〔通・塗〕。㉕松の人ーまつのひと〔塗〕。㉖みやこーみやこ〔静・東〕。㉗いはましを―いはまし〔塗〕。㉘よろこぼひてーよろこひて〔塗〕。㉙おもひけらしー思けり〳〵〔塗〕。㉚いひをりける―いひける〔塗〕。

釈

◇みちのくに　伊勢物語中ではすべて「みちのくに」となっており（一五・八一・一二五・一二六段）、「みちのおく」等の用例は1例もなく、第一段に引く古今集の河原左大臣の歌の中に「みちのく」の例がただ1例あるのみである。古今集では、歌の中では5例とも（六六・六七・七四・一〇六・一〇八）「みちのく」の形であるが、詞書類では「みちのくのすけ」（三六詞）「みちのくに」（三〇詞）「みちのくうた」（巻二〇・東歌の標題）となっている。後撰集も和歌中では2例とも「みちのく」、詞書類では7例とも「みちのくに（みちのくにのかみ）」。貫之集では和歌中に「みちのおく」が1例あるのみで、詞書類では「みちのく」の1例、ただし一異文「みちのくに」「みちのおく」の例。

かみ」（2例）。宇津保では「みちのくにのかみ」（1例）共に見える。

	葉	古今	貫之集	伊勢	大和	宇津保	後撰	蜻蛉	源氏	紫式部	枕草子	大鏡
みちのく	6	5	2	1	2	1	2	2				
みちのくに		1	2(2)	5	7	2	7	1	1	1		
みちのくに紙						6		1	10		5	3
みちのおく	1											

◇東山国第五十四：陸奥　三河乃於久　相名少

「さあ、一緒に」と言おうものを――あねは（娘さん）都へさあ一緒に――

と言ったものですから、（女は）にこにこと悦に入って、「あの方は、どうやらやっぱり私を愛していたらしい」

と、そう言っておりました。

◇みちのくに　伊勢物語中ではすべて「みちのくに」となっており（一五・八一・一二五・一二六段）、「みちのおく」等の用例は1例もなく、第一段に引く古今集の河原左大臣の歌の中に「みちのく」の例がただ1例あるのみである。古今集では、歌の中では5例とも（六六・六七・七四・一〇六・一〇八）「みちのく」の形であるが、詞書類では「みちのくのすけ」（三六詞）「みちのくに」（三〇詞）「みちのくうた」（巻二〇・東歌の標題）となっている。後撰集も和歌中では2例とも「みちのく」、詞書類では7例とも「みちのくに（みちのくにのかみ）」。貫之集では和歌中に「みちのおく」が1例あるのみで、詞書類では「みちのく」の1例、ただし一異文「みちのくに」「みちのおく」の例。

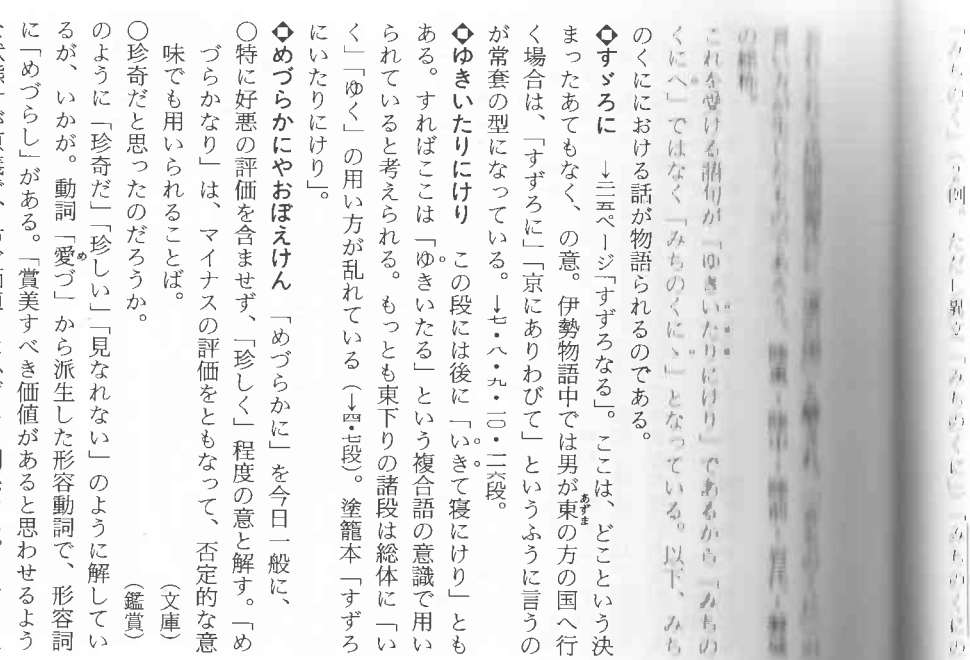
◇すゞろに　→二五ページ「すずろなる」。ここは、どこという決まったあてもなく、の意。伊勢物語中では男が東（あずま）の方の国へ行く場合は、「すずろに」「京にありわびて」というふうに言うのが常套の型になっている。→七・八・九・一〇・二六段。

◇ゆきいたりにけり　この段には後に「いきて寝にけり」ともある。すればここは「ゆきいたる」という複合語の意識で用いられていると考えられる。もっとも東下りの諸段は総体に「いく」「ゆく」の用い方が乱れている（→四七段）。塗籠本「すずろにいたりにけり」。

◇めづらかにやおぼえけん　「めづらかに」を今日一般に、○特に好悪の評価を含ませず、「珍しく」程度の意と解す。「めづらかなり」は、マイナスの評価をともなって、否定的な意味でも用いられることば。（文庫）

○珍奇だと思ったのだろうか。（鑑賞）

のように「珍奇だ」「珍しい」「見なれない」のように解しているが、いかが。動詞「愛（め）づ」から派生した形容動詞で、形容詞に「めづらし」がある。「賞美すべき価値があると思わせるような状態」が原義で、希少価値とは必ずしも関係ない。中古に入ると、②（同類が少ない。見慣れない。めったにない。珍しい）



と同様に、鄙の女のことゆえ、さような都の男など見たこともなく、何とまあ、すてきな人、と心ひかれ魅了させられてしまったさまを言っていると解するのが妥当であろう。

「～やおぼえけん」は、伊勢物語の常用の表現で、物語者の挿入した説明になっている（→四ページ）。「岸田武夫氏はこの句は条件句の挿入であり、文脈の折れまがりのところに心理描写をあらわす疑問表現の句がくると、情意性を強く印象づけるのに効果をもつといわれる（国文学・第四巻第十三号）」（全釈）。

◇せちに　◇七月十五日の月に出でゐて、せちに物思へるけしきなり。（竹取）

「切に」の呉音読みの語。心底から愛を抱いているのである。

◇中〳〵に恋にしなずは　くはこにぞなるべかりける　たまのをばかり　この歌は次の万葉歌に由来する。

◇中〳〵二　人跡不在者　桑子尓毛成益物乎　玉之緒許（万葉・三〇六）

右の外にも、同類の発想の歌が万葉に見える。

◇中ゝ二　君に恋ひずは　枚の浦の海士にあらましを　玉藻苅りつつ
（同・三七三）
◇中ゝ尓　人跡不有者　酒壺になりにてしかも　酒に染みなむ
（同・三四三）

「なかなかに」は、下の受け方によって次の説明のように二種に分けられる。

○①中途半端に。いいかげんに。なまじっか。下に否定ないし疑問の表現がくるのが常である。「中中二何か知りけむ吾が山に燃ゆる煙のよそに見ましを」（万三〇三）「思ひ絶えわびにしものを中々荷なにか苦しくあひ見そめけむ」（万七五）（以下、万三四・三七四の例、右参照）②いっそのこと。むしろ。かえって。下に仮定の表現がくる。「奈加奈可尓死なばやすけむ君が目を見ず久ならばすべなかるべし」（万三九四）「中々尓絶ゆとし言はばかくばかりいきのをにして吾恋ひめやも」（万六〇一）〔考〕ナカは中途・半ばの意のナカであり、これを重ねて助詞ニがついて副詞化したものである。したがって、①の現在の状況が中途半端で満足すべきものと思っていない状態をいうのが原義であり、これに対して、その現在の状況に反することがらを、むしろよりよいとするのが②の表現と考えられ、①から②へはその間に修飾のあり方の上で大きな飛躍があるが、もともとは一つであろう。
（時代別）

従ってここも「恋に死ずは」を単なる否定と解するか、仮定と解するかによって意味が分かれる。

「くずは」については、次のように諸説が行われている。

◇岩間より生ふるみるめしつれなくは　潮干潮満ち　かひもあ
（古今・恋四・六七）
りなむ
◇おしなべて峯も平らになりななむ　山の端なくは　月も入らじを
（古今・恋四・六八）
◇形見こそ今はあたなれ　これなくは　忘るる時もあらましものを
（二九段）
◇逢ひ見ずは　恋しきこともなからまし　音にぞ人を聞くべかりける
（古今・恋四・六七）

(2)「A」か「Aず」（「非A」）かの、いずれかになる可能性のある場合に、仮に「Aず」（「非A」）と想定して、そういう時は、という場合――仮定となる。仮にAしない（非Aの状態にある）としたら、その場合は…という意。

◇玉くしげみもろの山のさなづら　さ寝ずは　つひにありかつましじ
（万葉・九四）
◇庵多きしでの田長はなほ頼む　わが住む里に声し絶えずは
（四三段）
◇女あるじにかはらけ取らせよ。さらずは飲まじ。
（六〇段）
◇恋しくは　来ても見よかし　ちはやぶる神のいさむる道ならなくに
（七段）
◇君来ずは　ねやへも入らじ　濃紫わが元結に霜は置くとも
（古今・恋四・六三）

(3)　現実そのものが「Aず」（「非A」）の場合――仮定にはならない。こんなにAずして（非Aであって）、Aずに（非Aくしてから）は多くこれに従ってゐる。外にも、仮定条件…ないならば（大岩正仲氏）、肯定の仮定条件…あらば（浜田敦氏）などの解があり、沢瀉久孝博士は、はは詠嘆で、余意としていつその事、ままよとかいふ思ひ入つた嘆きがこめられてゐる（万葉集註釈巻二、十七頁）と説かれてゐる。
（全書）

今「Aずは」（「非A＝形容詞連用形くは」も同じ）と言う場合、次の三種の表現がある。

(1)「A」が現実の事実で、それを「Aず」（「非A＝形容詞連用形く」）と仮に否定して「は」で提示する場合――仮定となる。こんなAしている（Aの状態にある）のだが、仮にAしない（Aでない状態）としたら、その場合は…という意。

◇かくばかり恋ひつつあらずは　高山の岩根し枕きて死なましものを
（万葉・八六）

この歌、一般に「こんなにも恋い慕っていないで、高い山の岩を枕にして死んでしまったらよかったのに」のように解しているが誤解。他の例から帰納して次のように解すべきである。このように恋い続けているから（それを生きる力にして）死ぬことなど考えずにいるが、もし仮にこのように恋い続けることがないとしたら、（生きる望みも失せて）高山の岩を枕にして死んでいようものを。かく解すればこの歌と連作の「ありつつも君をば待たむ　うちなびく吾が黒髪に霜の置くまでに」（七）との続きも唐突でなくなり、他の同種の用例も一貫して解しうるのである。

◇今ゝ波　聞日は聞つゝ　代りぬる　（書陵）
◇岩間より生ふるみるめしつれなくは　潮干潮満ち　かひもあ
（古今・恋四・六七）
りなむ

◇おしなべて峯も平らになりななむ　山の端なくは　月も入らじを
（古今・恋四・六八）
◇形見こそ今はあたなれ　これなくは　忘るる時もあらましものを
（二九段）
◇逢ひ見ずは　恋しきこともなからまし　音にぞ人を聞くべかりける
（古今・恋四・六七）

(2)「A」か「Aず」（「非A」）かの、いずれかになる可能性のある場合に、仮に「Aず」（「非A」）と想定して、そういう時は、という場合――仮定となる。仮にAしない（非Aの状態にある）としたら、その場合は…という意。

◇玉くしげみもろの山のさなづら　さ寝ずは　つひにありかつましじ
（万葉・九四）
◇庵多きしでの田長はなほ頼む　わが住む里に声し絶えずは
（四三段）
◇女あるじにかはらけ取らせよ。さらずは飲まじ。
（六〇段）
◇恋しくは　来ても見よかし　ちはやぶる神のいさむる道ならなくに
（七段）
◇君来ずは　ねやへも入らじ　濃紫わが元結に霜は置くとも
（古今・恋四・六三）

(3)　現実そのものが「Aず」（「非A」）の場合――仮定にはならない。こんなにAずして（非Aであって）、Aずに（非Aくしてから）は多くこれに従ってゐる。外にも、仮定条件…ないならば（大岩正仲氏）、肯定の仮定条件…あらば（浜田敦氏）などの解があり、沢瀉久孝博士は、はは詠嘆で、余意としていつその事、ままよとかいふ思ひ入つた嘆きがこめられてゐる（万葉集註釈巻二、十七頁）と説かれてゐる。
（全書）

今「Aずは」（「非A＝形容詞連用形くは」も同じ）と言う場合、次の三種の表現がある。

(1)「A」が現実の事実で、それを「Aず」（「非A＝形容詞連用形く」）と仮に否定して「は」で提示する場合――仮定となる。こんなAしている（Aの状態にある）のだが、仮にAしない（Aでない状態）としたら、その場合は…という意。

◇かくばかり恋ひつつあらずは　高山の岩根し枕きて死なましものを
（万葉・八六）

この歌、一般に「こんなにも恋い慕っていないで、高い山の岩を枕にして死んでしまったらよかったのに」のように解しているが誤解。他の例から帰納して次のように解すべきである。このように恋い続けているから（それを生きる力にして）死ぬことなど考えずにいるが、もし仮にこのように恋い続けることがないとしたら、（生きる望みも失せて）高山の岩を枕にして死んでいようものを。かく解すればこの歌と連作の「ありつつも君をば待たむ　うちなびく吾が黒髪に霜の置くまでに」（七）との続きも唐突でなくなり、他の同種の用例も一貫して解しうるのである。

◇見ずもあらず　見もせぬ人の恋しくは　あやなく今日やながめくらさん
（万葉・一一）
◇刈こもの思ひ乱れてわれ恋ふと妹知るらめや　人し告げずは
（古今・恋一・四八）

本段の場合は、まだ恋のためには実際に死なずにいて、「恋に死なずは」と言っているのであるから、右の(3)に相当する。すれば「なかなかに」はその①の意となる。即ち、こんなふうに中途半端の、どっちつかずの状態で恋のために死なずにいては、の意となる。

「くはこ」は、桑の葉を食うところから、蚕につけた名称。ところで女が桑子になりたいと言う理由について諸説があり、以下その代表的な説――

A　蚕は短命ゆえと解するもの……愚見・闕疑・童子問・古意・精講など

B　一つのまゆに雌雄がこもり契り深きものゆえ……童子問・古意・新釈・精講など

C　単に女が日常管掌する無心の蚕を持ち出したのみ…高崎新釈

D　娘が馬に恋されて、この世では添いとげられぬので昇天して蚕になったという伝承（関敬吾氏『日本昔話集成』第二部、蚕神と馬。蚕由来。宮本常一氏「伝承者の系譜」『文学』昭33・8）を利用した……全書

後撰集に次のような歌がある。作者の藤原忠房は古今集の歌人で、貫之とも歌をやりとりしている（古今・雑上・九一四）。

◇　せうそこつかはしける女の返事に、まめやかにしもあらじなどいひて侍りければ　　忠房朝臣

ひきまゆの　かくふたごもりせまほしみ　桑こきたれてなくを見せばや　　（後撰・恋四・八七五）

右の「ひきまゆ」とは、一匹の蚕が作った一つの繭のこと。「ふたごもり」とは、

◇蟆蠶蛾　…和名比々留乃布多古毛利　　（本草和名・下）

とあり、一つの繭に二匹の蚕がこもっているものをいう。当時、このような話があり、又歌にまで歌われていたのである。『八雲御抄』にも、

◇蛾　おやのかふこのまゆとこもりといへり。ふたごもり、ひきまゆ　　（八雲御抄）

と見える。

『故事類苑』によると、

○一、大マユ　蚕二ツ三ツあるひは四ツもあつまりて繭一ツをつくる。節出来て上糸にはなりがたし。是を大マユとも麁繭ともいふ。　　（養蚕絹篩・下）

以上の資料を根拠にして、「ふたごもり」を羨んだという解に従うところで、養蚕に関して次のような説がある。

○蚕が身近な生活イコール鄙の世界というとらえ方はわかりますが、それを陸奥の娘と結びつけたのは、ちょっと乱暴な短絡思考のように思われます。というのは、鄙の最たる所である陸奥では、平安時代も九世紀さらには十世紀に下っても、養蚕はほとんど行われていなかったのではないかと思われるのです。…正史である『日本後紀』の延暦十五年（七九六）十一月八日の条の記事が参考になります。伊勢、参河（みかわ）、相模、近江、丹波、但馬等の諸国から優秀な技術を身につけている女性各二人を選んで、養蚕指導のため陸奥に派遣せしめたことがうかがえるのです。…延長五年（九二七）に完成した政府の編纂物「延喜式」という法典には、政府に諸国が上納すべき物品が指定されていますが、陸奥は、絹製品を上納しない数すくない国の一つになっています。／つまり、養蚕が普及しているのは鄙でも先進地帯で、ようやく皇威に帰順した蝦夷の国として蔑視される風の強かった陸奥では、その普及発達はさらに時代が下ってのことなのです。このへんに、実情に疎く先入観だけがこびりついている都人の思いちがいがあるようです。鄙のなかの鄙たる陸奥だからこそ、いっそう桑子（蚕）との縁が深かろうというわけです。　　（伊勢物語の世界・九〇ページ）

「玉の緒ばかり」とは、結びつないだ玉と玉との間の緒の長さをいう。きわめて短い間のたとえによく用いられる。因みに蚕の一生は六十日という。

◇逢ふことは玉の緒ばかり思ほえて　つらき心の長く見ゆらむ　　（三段）

◇うたさへぞひなびたりける　「さへ」は、

○人がらのひなびたるをしらせたる文也。　　（新釈）

という説明が参考になります。「ひなび」の語は伊勢物語中ここだけに用いる陸奥では、平安時代も九世紀さらには十世紀に下っても、養蚕はほとんど行われていなかったのではないかと思われるのです。…正史である『日本後紀』の延暦十五年（七九六）十一月八日の条の記事が参考になります。伊勢、参河（みかわ）、相模、近江、丹波、但馬等の諸国から優秀な技術を身につけている女性各二人を選んで、養蚕指導のため陸奥に派遣せしめたことがうかがえるのです。…延長五年（九二七）に完成した政府の編纂物「延喜式」という法典には、政府に諸国が上納すべき物品が指定されていますが、陸奥は、絹製品を上納しない数すくない国の一つになっています。／つまり、養蚕が普及しているのは鄙でも先進地帯で、ようやく皇威に帰順した蝦夷の国として蔑視される風の強かった陸奥では、その普及発達はさらに時代が下ってのことなのです。このへんに、実情に疎く先入観だけがこびりついている都人の思いちがいがあるようです。鄙のなかの鄙たる陸奥だからこそ、いっそう桑子（蚕）との縁が深かろうというわけです。　　（伊勢物語の世界・九〇ページ）

「玉の緒ばかり」とは、結びつないだ玉と玉との間の緒の長さをいう。きわめて短い間のたとえによく用いられる。因みに蚕の一生は六十日という。

◇逢ふことは玉の緒ばかり思ほえて　つらき心の長く見ゆらむ　　（三段）

◇うたさへぞひなびたりける　「さへ」は、

○人がらのひなびたるをしらせたる文也。　　（新釈）

という説明が参考になります。「ひなび」の語は伊勢物語中ここだけに用い

◇左右大臣、あこめぬきてたまへば、みこたち・殿上人、同じくぬきかけ給ふに、舞ひさして逃げてゆけば、「かれ、とどめよ」と召すに、恥ぢて参らねば、人々らうじ給ひて、大将に「たが子ぞ」と問ひ給へば、「しかしかの者どもの、兄おとどの子どもに侍。ひなびて、かくまかでつるなめり」とけいし給ふ。　　（宇津保・楼上下）

◇（玉鬘ハ）山がつめきて生ひ出でたれば、ひなびたる事多からむ。　　（源氏・玉鬘）

「みやぶ」の対で、貴族ふうに洗練されず、いかにも田舎めいてもっさりしていることをいう。

○同じ仲睦まじいもののたとえでも、もっと優雅なものもあるのに、蚕を引合いに出したのを田舎びていると言ったのであり、物語作者がわざと艶（えん）ならぬ歌を万葉集から引用し改作したのであろう。　　（全釈）

◇**あはれ**　伊勢物語の中で、この語の用いられている対象は次のように分類できる。

(1)　和歌…左例の外に、三・六・七・六五段にも。

◇「手を折りてあひ見しことを数ふれば十といひつつ四つは経にけり」かの友だち、これを見て、いとあはれと思ひて、夜の物まで贈りて詠める。　　（一六段）

(2)　相手の恋の熱心さ…左例の外に、三・九段にも。

◇女をとかくいふこと、月日経にけり。岩木にしあらねば、心苦しとや思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり。（六六段）

(3)　周囲の人間に同情的な気持を起こさせる状態…

◇（略）なりたる所へ行くを、男、まことに心ざしあるにはあらねど、あはれと思ひけれど、今はと行くを、いとあはれと思ひけれど、（三段）

(4)　夫婦の愛情…

◇いにしへよりもあはれにてなむ通ひける。　　（三段）

(5)　歌の歌い方…

◇笛をいとおもしろく吹きて、声はをかしうてぞあはれに歌ひける。　　（六五段）

(6)　泣き声…

◇「出でていなば限りなるべみともし消ち年経ぬるかと泣く声を聞け」、かの至、返し、「いとあはれ泣くぞ聞ゆるともし消ち消ゆるものともわれは知らずな」　　（三九段）

(7)　荒れた古屋（昔を思うて）…

◇荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人の訪れもせぬ　　（五段）

以上、感動詞「あはれ」2例、「あはれと」6例、「あはれがる」4例、「あはれに」2例（三・六五段）。

古今集では、

A　恋の気持で相手に対し……5例

B　花（梅・桜・やまとなでしこ・武蔵野の草）……4例

C　老人・老齢・昔を恋うて……4例

D　世の中およびその中の自分に対し……4例

E　月（恋をも兼ねる）……1例

F　死んだ人に対し……1例

G　愛情……1例

というふうに用いられており、形は「あはれと・あはれてふ」16例、「あはれあはれと」1例、感動詞「あはれ」3例、「あはれなる」1例（仮名序の中で）で、「あはれに」「あはれがる」の例は歌中には用いられず、その点で伊勢物語と相違する（↓古今全評釈・上、三二三・六七一ページ）。

「あはれ」の語義が具体的に理解できる例

◇あはれなるもの　孝ある人の子。よき男の若きが御嶽精進したる。…男も女も、若く清げなるが、いと黒き衣を着たるこそあはれなれ。九月つごもり、十月ついたちのほどに、ただあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの声。雞の卵抱きて伏したる。秋深き庭の浅茅に露の色々、玉のやうにて置きたる。夕暮、暁に、川竹の風に吹かれたる、目さまして聞きたる、又夜なども、すべて。山里の雪。思ひかはしたる若き人々の中の、せくかたありて、心にもまかせぬ。

（枕・あはれなるもの）

本段も、女の詠んだ歌に表現されている真情にほだされ、同情する気持を「あはれ」と言っていると解される。なお「あはれ」と思って「行きて寝にけり」は、亖段に二回も出てくる。

◇**夜ふかくいでにければ**　一般に、女が男の「心のとまらぬ事をいはでしらせたる」（古意）と解している。これに対し『ノート編』は次のように説く。

○これは、女がつまらぬ女だからといった意味でいっているように契沖は書いているが、そんなことはない。「夜深し」は暁という時間の来ぬうちである。午前二時から暁という時間になるわけだが、その前に帰った。夜深くの深くを特に効かしているので、田舎女だから、人目にたつことが不名誉だから、ことに警戒しているのだ。…結婚初期の男は夜帰る。…夜深く帰ることは、風習ではあったが、ここでは、相手が相手だからといっているわけだ。

（ノート編）

右いずれもうがち過ぎで、女の歌に鶏が「まだきに鳴きてせなをやりつる」と言っている通り、男は、鶏が鳴いたので夜が明けたと錯覚して、あわてて「夜深く」出て行ってしまったのである。この頃の男性は、一番鶏の鳴くころ、人目を忍んで女のもとからあわてて帰らなくてはならなかった。

◇**夜もあけば　きつにはめなで　くだかけのまだきになきてせなをやりつる**　「明けば」は、未然形＋バであるから仮定条件。「夜深く出でにければ」の時に詠んだので、まだ夜は明けていないのである。この夜でも明けたなら。

「きつ」については、狐説と水槽説とがある。

○「きつ」とは、きつねなり。「かけ」とは鶏也。「くだ」とは家をいふとぞものしれりし人は申し侍りしかど、はじめに宿とよみて又家の鳥といはむことといかゞ。もし、「くだ」は、「くづ」といへるにや。五音の字也。「くづにはとり」とよめるにやともきこゆ。　（清輔『奥義抄』中。日本歌学大系一による）

○「きつ」とは、きつねなり。「はめなで」とは、くはせんとなり。「くた」とは家也。「かけ」とは鶏也。宅鶏とかきて、くたかけといへり。家のにはとりなれば、きつねにくはせんといふなるべし。…又あるものには、みちのくにのなか[illegible]

[illegible]

[illegible]「きつね」といふ字を「きつ」とよませたり。その[illegible]ばきつねこのみてくらふものなれば、これにくはせんといへるは、あひかなひてはべり。ふねかづけて、鶏かんだうせんとは、よりどころうとくおぼえ侍り。（著者未詳・書陵部本『和歌知顕集』、鎌倉末期頃写。片桐洋一『伊勢物語の研究〔資料篇〕』による）

これらの「狐」説に対し、新釈は一応賛同しながらも、出羽秋田出身の平田篤胤の「水を蓄ふる器」説をも紹介している（↓〔古注釈〕）。

○「狐」の意とする説は、古く奥義抄以来の説で、「はめなで」を「食めなで」または「はめなん」と本文を訂して、「狐に食わせてしまおう」と解した。これに対し、「きつ」を水槽の意の東北方言と見る説は、平田篤胤・小林好日（竹岡云『国語と国文学』一九の九）などが唱えた。東条操「全国方言辞典」によると、

きつ　①米を入れたり魚を飼ったりする木箱。櫃。（津軽・秋田・岩手・新潟）②衣類を入れるための長持の如き小箱。（常陸）

きす　①生魚を飼っておく箱。（新潟県蒲原地方）②台所の水槽。（新潟県中蒲原郡）

きし　米穀類を入れる大形の箱。（岩手県紫波郡）

きち　木製の櫃。板庫。（津軽・秋田県平鹿郡）

きっち　①板蔵。櫃。（宮城）②丸木をえぐった馬糧い[illegible]

[illegible]木の櫃。（青森・秋田・[illegible]）②米びつ。（青[illegible]県刈羽郡・宮城・福島）③木製の飯櫃。（会津若松）

などの諸形が、東北・新潟地方を中心に分布している。この説を取れば、「はめなで」の「はめ」は「嵌め」と解しうる。「なで」は「枯れなで」などの「なで」と同じく、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に打消の「で」が付いたもので「はめないで」の意とし、「はめないでおくべきか」の意の略とする説もある。

（大系）

○「狐」を「キツ」と読んだ例は、『万葉集』巻十六の「刺名倍爾湯和可世子等櫟津乃檜橋従来許武狐爾安牟佐武」（三八二四）の第五句を字余りにしないため「きつにあむさむ」と読む古い読み方以外に例がない（現代の万葉研究では「きつね」と読んでいる）。この「きつ＝狐」説に対して生まれたのが水槽説である。…この場合、「はめなで」の「はむ」は「食わせる」ではなく、「投げ入れる」意。「て」は「ん」の誤写とする可能性も大きいが、これも奥羽地方の方言と解しておく。

（鑑賞）

「きつ」水槽説の根拠が方言にあるとするなら、「きつ」狐説の根拠も同様に方言に求めることができる。ただし水槽説のように今日の東北方言に見えないのが弱点といえばいえようか。

○きつ　〔方言〕きつね（狐）。新潟県（田中勇吉『越佐方言集』）・愛知県（黒田鉱一『愛知県方言集』）・香川県（草薙金四郎『讃岐の方言』）

（国語大辞典）

第14段　みちのくにの女

○きつんぼ　狐。愛知県北設楽郡
きゃつ　狐。尾張
きゃん　狐。三重県度会郡
きゃんきゃん　狐。熊本県鹿本郡
きんこ　狐。静岡
どんげつ　狐。兵庫県揖保郡　（以上『全国方言辞典』）

「きつね」の「ね」はおそらく「杵（きね）・羽（はね）・頸（うなね）・妹（いもね）なね」などと同じく、名詞の接尾辞的構成要素であろう。『時代別』では、

○藤原教長の貧道集に「暁にきつねの鳴くを聞きてよめる」の詞書の下に「聞く人の栄ゆと言へば夜を寒み鳴くなるきつをあはれとぞ聞く」がある。伊勢物語のキツを狐にとる説は清輔の奥義抄に見え、教長は清輔と時代を同じくし、親交もあったので、キツを狐とする歌語意識で用いたとすれば例にならない。万葉の「狐」をキツと訓むには七音に揃える意図もあろうが、キツネと訓んでも同じ句中にアの音節があるので字余りとはならない。キツの語の実在ははなはだ疑わしい。と片づけているが、一概に無視しさるわけにはいかない古い例であって、即ち『前参議教長御集』（丹鶴叢書）に、

◇　おなじ日のあかつきにきつねの鳴をきゝてよめる
聞く人のさかゆといへば　夜を寒み　鳴なるきつを哀とぞきく　（春歌・一三）

と見える。「水槽」説にはかような古い確例のないことがこれ又弱点といえよう。現在、右の両説のいずれに従うべきか、決定できる根拠がない。ただ考えるのに、当時の都の読者たちは「きつ」を、彼に水槽の意の東北方言が当時存在したとしても、直ちに水槽と解することができたかどうか、むしろ教長の例があるように、狐と一般に解されたのではあるまいかと思われる。次に「はめなて」の解釈が問題である。ごく最近の注釈を見ても、

○夜が明けたら、水槽にぶち込まずにおくものか。　（集成）
○「はめなで」は「はめなむ」の誤りで「入れてやろう」の意とする説と、「はめなでおくべきや」の略で「入れないでおくものか」という強い意志表現であるとする説とがみられるが、後者をとる。　（全訳注）
○「はめなで」は、「きつ」を狐とする説ともあいまって諸説がある。「嵌め」に完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」がつき、さらに打消の「で」のついたものとする説が多いが、問題の残るところである。むしろ、全体の歌意から見て、「嵌めなむ」の意の方言と解したい。　（新版）

という状態で、誤字説は論外として、「はめなでおくべきや」の略の如き、文法上からいっても到底従いがたい。「はむ」には、確かに「喙食也、…久不、又波牟、又須不。」（新撰字鏡）と「入イルハム」（名義抄）との両義があり、食わせる意の方は狐説に、投げ入れる意の方は水槽説に適用できる。ところで「はめ」はそれらの他動詞の未然形とも連用形とも考えられるが、連用形とすると下の「なて」が上に見た通り語法的に説明できない。そこで未然形と考えると、「な」は次のような終助詞とせざるを得なくなってくる。

○な（助）　文末にあって動詞・助動詞の未然形につき、希望をあらわす。（中略）自己（あるいは自分たち）の行動の実現を希望

し、あるいはその動作をもって生ける物質にも施すものには、あれば今ある間は楽しくをあら名（万三四）「須波瀬の潮口の田ゐに秋田刈る妹がりやらむ黄葉手折ら奈（万一五六）「秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行か奈萩の花見に」（万二〇三）（下略）　（時代別）

狐説・水槽説のいずれの場合でも、「な」は、右のⓐの意に解し得るのである。

残る「て」は、次例の「て」と同じく助詞「と」の東国方言と解することができる。

◇忘らむ日　野ゆき山ゆきわれ来れど　わが父母は忘れせぬかも　（万葉・四四四、防人歌）
◇父母が頭かきなで「幸あれ」言ひし言葉ぜ　忘れかねつる　（同・四四六、防人歌）

○て〔格助〕上代東国語形。格助詞「と」に相当する。（用例、略）

〔語誌〕東国語の中でも、特に駿河の国では中央語との間で乙類ö↓乙類eという音韻的対応が多くみられるのであるが、助詞に限っても、右の用例（万葉・四四六）中の「ぞ」→「ぜ」の他に、「も」→「恋ふしくめ〔米〕」〈万葉・二〇・四四三〉や、「に」→「吾ぬ〔努〕」〈万葉・二〇・四三六〉など防人歌には多く認められる。

そして、この「と」は、例えば、

◇人知れぬ思ひやなぞと　芦垣の間近けれども　逢ふよしのなき　（古今・恋一・五六、よみ人知らず）

と同類の軽く添えられた「一つのと」（詞の玉緒・五。「とに意なし」）。強いて訳せば「…といわんばかりのさまで」「…といった

「くだかけ」については、古俚俗辞書類では、屠蘇を異称、小さき鶏（憲見抄）、家鶏（惟清抄・闕疑抄）、鶏（壒嚢抄・古今集など）、朽鶏（比古婆衣・新釈など。大言海）などあり、更に、クタレカケ（腐鶏）（擁書漫筆）、クダラカケ（百済から渡来した鶏）（北辺随筆・名言通・南方熊楠「鶏に関する伝説」）、鶏の意の梵語ククタエシラの略、あるいは声のよいところからクダカケ（管掛）か（倭訓栞）、クド（くぐまったところ）カケ（声をかける）（宇田甘冥『本朝辞源』）、クタはカズツラ（数連）の反、カケは鶏声（名語記）（以上『国語大辞典』による）の如き説が出されていて、定説はなおない。

「鶏」を「カケ」と言ったことは、左の諸例から知られる。

◇庭つ鳥可鶏の垂り尾の乱れ尾の長き心も思ほえぬかも　（万葉・一四三）
◇さ野つ鳥雉はとよむ　庭つ鳥迦祁は鳴く（古事記・歌謡・二）
◇には鳥はかけろと鳴きぬなり　起きよ　起きよ　わが門に夜の夫　人もこそ見れ　（神楽・酒殿歌）

右神楽歌によればその鳴き声の擬音に由来することが知られる。「くだ」は、おそらく次の「くだ」が化石的に残ったものであろう。

◇笶　吹笛為二起居節一席也、波良、又久太。　（新撰字鏡）
◇角　大角、波良乃布江。小角、久太乃布江。　（和名抄）

即ち『新撰字鏡』の説明のように、起居などの合図に吹き鳴らした小さな笛であったろうが、起床と就床との合図をする鶏の声が、その笛の音に似通っているところから、「かけ（鶏）」の

○きつんぼ　狐。愛知県北設楽郡
きゃつ　狐。尾張
きゃん　狐。三重県度会郡
きゃんきゃん　狐。熊本県鹿本郡
きんこ　狐。静岡
どんげつ　狐。兵庫県揖保郡　（以上『全国方言辞典』）

「きつね」の「ね」はおそらく「杵・羽・頸・妹なね」などと同じく、名詞の接尾辞的構成要素であろう。『時代別』では、

○藤原教長の貧道集に「暁にきつねの鳴くを聞きてよめる」の詞書の下に「聞く人の栄ゆと言へば夜を寒み鳴くなるきつをあはれとぞ聞く」がある。伊勢物語のキツを狐にとる説は清輔の奥義抄に見え、教長は清輔と時代を同じくし、親交もあったので、キツを狐とする歌語意識で用いたとすれば例にならない。万葉の「狐」をキツと訓むには七音に揃える意図もあろうが、キツネと訓んでも同じ句中にアの音節があるので字余りとはならない。キツの語の実在ははなはだ疑わしい。と片づけているが、一概に無視しさるわけにはいかない古い例であって、即ち『前参議教長御集』（丹鶴叢書）に、

◇　おなじ日のあかつきにきつねの鳴をきゝてよめる
聞く人のさかゆといへば　夜を寒み　鳴なるきつを哀とぞきく　（春歌・一九三）

と見える。「水槽」説にはかような古い確例のないことがこれ又弱点といえよう。現在、右の両説のいずれに従うべきか、決定

ちに水槽と解することができたかどうか、むしろ教長の例があるように、狐と一般に解されたのではあるまいかと思われる。次に「はめなて」の解釈が問題である。ごく最近の注釈を見ても、

○夜が明けたら、水槽にぶち込まずにおくものか。　（集成）
○「はめなで」は「はめなむ」の誤りで「入れてやろう」の意とする説と、「はめなでおくべきや」の略で「入れないでおくものか」という強い意志表現であるとする説とがみられるが、後者をとる。　（全訳注）
○「はめなで」は、「きつ」を狐とする説ともあいまって諸説がある。「嵌め」に完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」がつき、さらに打消の「で」のついたものとする説が多いが、問題の残るところである。むしろ、全体の歌意から見て、「嵌めなむ」の意の方言と解したい。　（新版）

という状態で、誤字説は論外として、「はめなでおくべきや」の略の如き、文法上からいっても到底従いがたい。「はむ」には、確かに「喙食也、…久不、又波牟、又須不。」（新撰字鏡）と「入（イル）ハム」（名義抄）との両義があり、食わせる意の方は狐説に、投げ入れる意の方は水槽説に適用できる。ところで「はめ」はそれらの他動詞の未然形とも連用形とも考えられるが、連用形とすると下の「なて」が上に見た通り語法的に説明できない。そこで未然形と考えると、「な」は次のような終助詞とせざるを得なくなってくる。

○な　（助）　文末にあって動詞・助動詞の未然形につき、希望

[illegible]

三〇三）（下略）　（時代別）

狐説・水槽説のいずれの場合でも、「な」は、右のⓐの意に解し得るのである。

残る「て」は、次例の「て」と同じく助詞「と」の東国方言と解することができる。

◇忘らむ日　野ゆき山ゆきわれ来れど　わが父母は忘れせぬかも
◇父母が頭かきなで「幸あれ」言ひし言葉ぜ　忘れかねつる　（万葉・四四四、防人歌）
（同・四四六、防人歌）

○て〔格助〕上代東国語形。格助詞「と」に相当する。（用例、略）

〔語誌〕東国語の中でも、特に駿河の国では中央語との間で乙類ö↓乙類eという音韻的対応が多くみられるのであるが、助詞に限っても、右の用例（万葉・四四六）中の「ぞ」→「ぜ」の他に、「も」→「恋ふしくめ〔米〕」〈万葉・二〇・四四五〉や、「に」→「吾ぬ〔努〕」〈万葉・二〇・四四六〉など防人歌には多く認められる。

そして、この「と」は、例えば、

◇人知れぬ思ひやなぞと　芦垣の間近けれども　逢ふよしのなき　（古今・恋一・五六、よみ人知らず）

と同類の軽く添えられた「一つのと」（詞の玉緒・五。「とに意なし」）。強いて訳せば「…といわんばかりのさまで」「…といった

ど、[illegible]（北辺随筆）、クダラカケ（百済から渡来した鵜）（北辺随筆・名言通・南方熊楠「鵜に関する伝説」）、鵜の意の梵語クタエシラの略、あるいは声のよいところからクダカケ（管掛）か（倭訓栞）、クド（くぐまったところ）カケ（声をかける）（宇田甘冥『本朝辞源』）、クタはカズツラ（数連）の反、カケは鶏声（名語記）（以上『国語大辞典』による）の如き説が出されていて、定説はなおない。

「鶏」を「カケ」と言ったことは、左の諸例から知られる。

◇庭つ鳥可鶏の垂り尾の乱れ尾の長き心も思ほえぬかも　（万葉・一四一三）
◇さ野つ鳥雉はとよむ　庭つ鳥迦祁は鳴く（古事記・歌謡・二）
◇には鳥はかけろと鳴きぬなり　起きよ　起きよ　わが門に夜の夫人もこそ見れ　（神楽・酒殿歌）

右神楽歌によればその鳴き声の擬音に由来することが知られる。

「くだ」は、おそらく次の「くだ」が化石的に残ったものであろう。

◇笶　吹笛為二起居一節席也、波良、又久太。　（新撰字鏡）
◇角　大角、波良乃布江。小角、久太乃布江。　（和名抄）

即ち『新撰字鏡』の説明のように、起居などの合図に吹き鳴らした小さな笛であったろうが、起床と就床との合図をする鶏の声が、その笛の音に似通っているところから、「かけ（鶏）」の

上に冠したものであろうと考えられる。

◇野つ鳥 雉はとよむ　家つ鳥可鶏も鳴く　さ夜は明け　この夜は明けぬ　（万葉・三二〇）

◇遠妻と手枕かへてさ寝る夜は　鶏が音な鳴き　明けば明けぬとも　（同・二〇三）

◇里中に鳴くなる鶏の喚び立てて　いたくは鳴かぬ　隠妻はも　（同・二六〇三）

いずれも夜明けの鶏の鳴くのを気にしている夫婦の例である。

「まだきに」は、早くも、早々と。六段にも。

「せな」の「な」は接尾語で、万葉集の確例では、東歌と防人歌に集中しているところから、上代の東国方言と考えられる。夫や恋人、兄弟といった親しい男性を言う女性用語。

◇草枕旅行く世奈が丸寝せば家なる吾は紐解かず寝む　（万葉・四二六、椋椅部刀自売）

「やりつる」の「やる」は、「思い切って行かせる。命じて行かせる。」（岩波古語）といったニュアンスを伴った言い方の語。「つる。」は連体止めで「つること！」の意。こんなに行かせてしまったじゃないの！というような語気。

◇といへるに　○塗籠本「といひけり」。家本「といへりける」。名本「といひけるを」。注釈も、このつづきの時間に苦労したようである。といったところが、と訳して、それに、しばらく仲らいがつづいたことをこめておけばよい。　（ノート編）

○「いへるに」は「いひけり」とするテキストもある。その方がわかりやすい。女がこの歌をよんだ時に男が帰京するといい出したのではないのに注意。／〔訳〕と言ったりしていたのだが、　（文庫）

この前後の地の文には一々「けり」を伴って物語の世界内の事として物語口調で物語っているのに、この部分だけ「けり」を伴っていないのは、物語者の現場に戻して物語口調でなく叙述しているのである。従ってこの部分は物語の世界内の時間などに支配されず、いわば物語内の時間を超越しているわけである。

◇心地まどひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、しのぶずりの狩衣をなむ着たりける。　（二段）

「〔歌〕」

◇心うがりて行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、「〔歌〕」と言ひて見出だすに、からうじて大和人来むと言へり。喜びて待つに、度々過ぎぬれば、「〔歌〕」と言ひけれど、男住まずなりにけり。　（三段）

右の傍線部も同様の言い方（→二段）。

◇京へなんまかる　○「まかる」は丁寧語的用法。ことば使いの上での対応が丁重なのに注意。都のフェミニストぶりがよく出ている。〔補注〕普通、地方から京へ行く場合は、「のぼる」「参る」を用いる。「まかる」は用いない。敬意の対象となるところを中心として遠心的に遠ざかる移動が「まかる」、求心的に接近する移動が「参（まゐ）る」だからだ。京は常に中心で、地方は遠心的なとらえ方をするのが普通。ここは、謙譲語とすると、「女」に敬意の焦点を定めた、遠心的な移動を表わす用法になるが、「まかる」には、もう一つ、会話文に集中し、話のわかる「行く」などの動作を、聞き手に敬まって

それとみたい。

「京へなんまかる」は男の女に対する会話の言葉。女の歌の「せな」を遣りつる」といった、いかにも田舎風のぞんざいでつっけんどんな言い方に対し、わざとこう言わせて、田舎女の無教養な言葉づかいと、優雅な都会男のみやびた言葉づかいとを対比させ、きわだたせているのであろうと思われる。

◇くりはらのあれはの松の　人ならば　みやこのつとにいざといはましを　「くりはら」は地名。　（和名抄）

◇陸奥国　…栗原（久利波良）

「あれは」は地名であろう。一般に「あねは」の誤写とし、「姉歯の松」を次のように解する。

○宮城県北部、金成（かんなり）町姉歯にある松。小野小町の姉の墓上に植えた五葉松といわれる。歌枕。＊宇津保―内侍督「きく人はあねはのまつの風なれやむかしのこゑを思ひいづるは」（下略）　（国語大辞典）

○奥羽観蹟聞老志云「姉歯松（歌枕作姉場、松葉集作姉葉、藻塩草作阿礼葉。今従夫木集）去沢辺東十二町余、在利崎村、有長松樹是也、古松乃四十余年前枯槁、其松五葉後人継而所植新松也。古老相伝、是乃松浦佐用姫者之姉某暮上樹也。或曰、小野小町姉也。往昔有寺号松語山龕蔵寺、是乃妹子為亡姉所建精舎也。」と

「あねは」は、

○あね…①同じ親から生まれた子のうち、年上の女性。実姉。いろね。…＊十巻本和名抄―「姉　爾雅云女子先生為姉（音

と説明されている中の特に③の意味のものであろう。それよりも「あねは」（「あねば」であったかもしれない）は「あねま」と通じた東国方言であったのではあるまいかと考えられる。

○あねま（女郎）（名）女郎を東北地方でいう。＊随筆・筆まかせ「あねま。酒田女郎の詞づくし〈略〉あねま、女郎の事をいふ」（方言）①姉。ねえさん。山形県庄内（仙台税務監督局「東北方言集」）…④若い女。娘。主に他家の娘。山形県飽海郡（雑誌「心の花」）…⑤下女。ねえや。山形県庄内（山形師範「山形県方言集」）…⑥娼妓。じょろう。秋田県由利郡（県学務部学務課「秋田方言」）山形県庄内（黒川友恭「荘内方言考」）（国語大辞典）

おそらく、女性の腰でもひねったごとき姿を連想させるようで目に立つ松に「あねはの松」と名づけて民謡なんかに歌われていたものが、後そこの地名ともなって「姉歯」のように表記されたものであろう。そして「あねは」は若い女、ねえさん、女郎のいずれの意味であったかは不明だが、歌を聞いた東国女が喜んでいるのであるから、若い女・娘さんといった意味であったろうと推測できる。「栗原の『あねは（若い女）の松』がその名の通りもし人であったなら」と歌っているのである。

ところで、一般の解釈は、近代においても、この女を「姉歯の松」に寄せて「人ならば」と言っていることについて次のように解しているが、いずれもうがち過ぎの感がある。

A　おまえがいなか者でなく、もう少しまともな人並みの女なら……高崎新釈・ノート編・精講・大系・全集・新版など

B　都人も見たいとしている名物の松のようにすばらしい女であったら…全釈・全訳注

C　この土地を離れ得るものなら…集成

男の歌は、次図のように、女に対する心情を「あねはの松」讃美の歌に寄せているのである。

あねは ……都……いざ ＝（女への心情）
栗原の あねはの松の人ならば　都のつとに　いざと言はましものを

即ち「栗原の『あねは（娘さん）』という名のつくあの松が名前の通り人であるなら、都へのお土産に『さあ、一緒に』と言おうものを（「あねは（娘さん）よ、都に、さあ一緒に！」）」という意の歌なのである。なお→（評）。このように心情を他に寄せて表現した歌は、古今集にはきわめて多く見られ、さような歌を「さま」を得たと貫之は言っているのである（古今・仮名序）。古今集よりの一例（恋四・六六三、詠み人しらず）、

伊勢の海士の朝な夕なに潜ぐてふ　海松藻に……飽く
見る目に　人を　飽く　由もがな

なお、古今集・東歌の中に次の歌があり、これを改作したものが、伊勢物語のこの歌であろうとされているが、当時、地方において美しい小島や松やその他景色など、都へ伴って行けないものを見ると、「都のつとにいざと言はましを」と歌うのは、一つの型となっていたものであろうと思われる。

◇をぐろさきみつのこじまの人ならば　宮このつとにいざといはましを

◇以ㇾ贅与ㇾ人也。贅也。豆止、又太加良也。（新撰字鏡）

○いざ　里言『サア』といふ。人をさそふ詞也。（かざし抄）

「言はましを」は上の「あねはの松の人ならば」に呼応している。女への心情にまでは関係がない。

◇よろこぼひて　この語、他に所見がない。「喜ぶ」の未然形「喜ばし」に、反復・継続の意を表す接尾語「ふ」の連用形「ひ」を伴ったもの。下の「言ひをりける」と呼応する。男の歌の「あねは（娘さん）…都…いざ」と聞いて以後、始終にこにこと悦に入っていたというのである。

○女は姉歯の松の歌の真意を曲解して喜んだのであろう。すなわち、姉歯の松は松だから連れて行ってもらえないが、私は人だから連れて行ってもらえるというように、単純に解釈したのであろう。歌の真意をとらえられないのは、風流に欠ける田舎女の悲しさである。（全釈）

○もう少し人並みなら…と男は言う。だが、女は「まかる」という聞き手尊敬の敬語にまどわされたのか、「…ならば…まし」という反実仮想の話法がわからなかったのか、どんな女にもいちおうあいさつするみやび男のエチケットに慣れていなかったからか、がっかりするどころか、喜んでいたというのである。／…地方の女に対する優位を前提にしたみやび男業平の姿しかここにはない。（鑑賞）

のように解するのは、男の歌とこの一編の主題との誤解に基づくもので、到底従いがたい（→（評））。

◇おもひけらし　「き」は根拠を持って回想する時で、ここで普通には説明を為すに用ゐられ、又疑問詞あるはずに用ゐる。…「こそ」は、一の事物をとりいでて時に指定する意ありて、

（山田孝雄、日本文法学概論）

「をり」は低めた言い方。→三七ページ。

○段にいう、「人の国にても、なほ、かかることなむやまざりける。」の具体例の一段である。

評

和歌として「さま」を得た雅なる歌などは到底詠めない、全く鄙びた方言丸出しの「ただ言歌」の女の歌と、雅なる歌の見本ともいえる都の男の歌、そんな歌であっても仲介となって、さいはての道の奥の女と、都の「めづらかなる」男との間にだってちゃんと男女の愛情が交流し合うことを、やや諧謔味を帯びた述べ口で物語っているのである。

女の詠んだ「なかなかに」の歌は、元来万葉の歌を東女の歌として転用したものだが、「桑子」になりたいと言うところにこの物語作者は「鄙び」た趣を感じとっているのであろう。そこに、作者の万葉歌の受け取り方も知られる。「夜も明けば」の歌となると、「きつ」「はめ」「…なて」「くだかけ」「せな」と方言や俗語をふんだんに用いていて到底雅なる和歌とはいえない。そんな歌でも女の真情は京の男に、さらには読者にも十分通じる。と同様に、男の「栗原の」の雅なる歌でも、やはりちゃんと東の女に了解されるものなのであった。和歌ならではの優れた効用である。

この一段、無教養で哀れな東女を、京のみやび男が嫌って去

しいという気持を根本とした東女らしい真情の気持を強く出して「思ひけり、思ひけり」となっている。男が自分を残して置いて上京するというので、今までの愛情は単なる旅人の気慰みにすぎず、自分のような田舎女など愛してはいなかったのだと気に病んでいたのである。それが男から「あねは―都―いざ」という歌をもらって、心配も消えて、やっぱり私を愛していてくれたらしい（塗籠本によれば、私を愛していてくれたんだわ、私を愛していてくれたんだわ）と安心して喜んでいるのである。「自分と別れるのを、男がつらく思っていると考えたのだろう。ああ、やはり、という、男の気持ちをはっきり、今、つかんでほっとする気持ち、それが、『けらし』に凝縮している。」（文庫）

◇とぞいひをりける　この段には係助詞「ぞ」が二回用いられている。伊勢物語一二五段のうち、和歌を除くと「ぞ」が地の文中に用いられているのは案外少ない。

A　和歌の中で…六・九・一〇・一四・一七・三一・三三・三三・三四・三五・三三・三五・三七・四一・四三・四五・四八・四九・四九・五三・五五・五七・六〇・六一・六五・六七・七〇・八三・八五・八八・一〇三・一〇七・一一二・一一四・一三四段

B　会話・心中詞の中で…六・六三・六五段

C　批評的、注釈的、後日談的本文の中で…五一・一四・三九・八七・九六段

D　物語地の文の中で…本条・六〇・六五段

係助詞「ぞ」の意味については、『あゆひ抄』の「ぞ…肝心ばかり出だし示すことば」「こそ…外の物をよくかたづけて肝心の見ゆる様にして置くことば」という説を受けた山田孝雄博士の次

って行った、というふうに読みとるべきお話ではない。

古注釈

『愚見』▽**中〳〵に…玉のをばかり**　是は万葉十三の哥也。「桑子」はかいこをいへり。歌の心は、恋をしてしなれずして久しく物を思はんよりは、かいこになりて、しばしばかりありてしなんやとよめる也。「玉のをばかり」は、しばしといふ心也。古今歌「しぬる命いきもやすると心みに玉のをばかりあはんといはなむ」。かいこは一年のうちにしぬる虫なれば、かくいへり。▽**哥さへぞひなびたりける**　「ひな」はゐなかを云。桑子は田舎にかふ物なれば、みなるゝまゝに哥にもよめるなり。▽**夜もあけば…せなをかへせば**　「きつ」は狐也。「はめ」は食の字也。狐にくはする心也。「くだかけ」は庭鳥の名也。鶏といふ字を「かけ」とはよめり。それに「くだ」といふ詞をそへたるは、ちいさきを「くだ」といへば、ちいさき鶏也。「まだきに」は速の字也。はやき心也。「せな」は夫なり。庭鳥ははやくなきて、おとこを返しつとうらむる也。▽**くりはらのあれはの…いはましを**　「くりはら」一本に「くはばら」とかけり。「あれは」一本ニ「あねは」と有。奥州の所の名也。古今集第廿東歌に「をくろざきみつの小嶋の人ならば都のつとにいざといはましを」と有。第一第二句のかはれるばかりなり。古今集の歌は、みつの小嶋がおもしろき所にてあるほどに、その人ならば都へさそひてのぼらんとよめり。此哥は、松が人にてあらばさそひてのぼらんとよめり。いさゝかの心かはれり。「つと」は裏なり。みやこのみやげにつゝむ土産をつとゝいへば、それによせていへるなるべし。▽**よろこぼひて…いひをりける**　「よろこぼひ」は、よろこびたるなり。都へかへりていかばや

といへるを、女の心によろこべるなり。

『肖聞』▽**むかし男みちのくにゝすゞろに**　「すゞろ」とは心ならずとなり。「辛」の字をも用。そこなるたれともなし。▽**中〳〵に恋にしなずはくはこにぞ**　心は、恋と云物はあひみる事をたのむに、さも侍らねば、せめてしなんとも思ふにそれも又かなはぬ心也。されば中〳〵に恋にしなであらば、せめてくはこにもならばやと云也。桑子は契ふかき物也。又いのち一年を過ざる物なればとり合てかくねがふ也。▽**夜もあけば…くだかけの**　「きつに」とは狐也。下略也。「くだかけ」は家の鶏と云心也。但庭鳥と心うる至極也。心は、夜ふかく啼て思人をかへせば狐にくはせんといへる也。此段みな作物語也。▽**くりはらのあねはの松の人ならば**　是も「をぐらざきみつのこ嶋の人ならば」と云哥をいひかへて作たる也。心は、あねはの松を其人にたとへて、さそはるべき人ならば「いざ」といはまし物をといふ也。▽**よろこぼひて**　東国の詞也。「思けらしとぞ」とは男の思けるよと女のいひて悦たる也。

『惟清』▽**昔男…サテカノ女、●中〳〵ニ…玉ノヲバカリ**　中〳〵ニ、恋ニ死ナズシテ、アランナラバ、セメテ、カイコニナリトモ、成タキト也。カイコハ、ハカナケレドモ、イモセノ契、フカキ物ナレバ也。又ハ、命一年ヲスゴサヾル物ナレバ、恋ニ死ナズハ、年ヲスゴサズシテ、今年内ニナリトモ、ナリタキト也。▽**哥サヘゾ…イデニケレバ女**　「ヒナビタル」イナカウドシキ也。「サスガニアハレトヤ」業平ノ、人ヲステヌ心也。「夜ノカク出ニケレバ」心トメンヤウニ、ナキ、夜ノカク出ニケル也。●

ハ、狐ニクハセントカリ。「ツヾカケ」ハ、家ニ[illegible]「カケ」ト、バカリモヨメリ。万葉十二「里ナカニ鳴ナルカケノ、コヒタテ、、イタクハナカヌ、カクレ妻カモ」。▽**トイヘルニ…マカルトテ●クリハラノアネハノ…イハマシヲ**　「ヲクロザキ、ミツノ小嶋ノ人ナラバ、都ノツトニ、イザトイハマシ」ト云哥ヲ、上ノ句ヲカヘテスル也。松ノ如クニ、主モナキ人ナラバ、都ノツトニ、サソハン物ヲト也。▽**トイヘルリケレバ…イヒヲリケル**　悦也。「思ヒケラシトゾ」業平ノ、我ヲ思ヒケルト也。

『闕疑』▽**むかし男…かの女**　「すゞろ」こゝろならず也。▽**万葉中〳〵に…玉のおばかり**　「桑子」蚕也。恋と云物はあひみる事をたのむに、さも侍らねばせめて死なんとおもふに、それも又叶はぬ心也。されば中〳〵に恋に死なであらば桑子にならばやと云也。桑子は命一年を過ざる物也。されども契の深きものなれば、とり合せてかくねがふ也。此哥、万葉に有。少替て云り。是又作物語の故也。万「中〳〵に人とあらずは桑子にぞならまし物を玉のおばかり」玉のおばかりは、そとの間なり。「しぬる命いきもやすると心見に玉のおばかりあはんといはなん」「たらちねの親のかうこのまゆごもりいぶせくも有か妹にあはずて」▽**哥さへぞ…出にければ**　「ひなびたりける」田舎びたる也。女の方より心をかけたる也。心中相応してゐ中めきたると也。「さすがに哀とや」業平の人をすてぬ心見えたり。「夜ふかく出にければ」心とめん様もなきか明るをまたで出る也。末摘花の巻に「何事につけて御心もとまるらん、夜ふかく出給ふ」と有、是より書出したり。▽**夜も明ば…やりつる**　天福本勘物「東国之習、家を『く

『拾穂』▽**すゞろ**　玄心ならず也〔そこなる女　肖誰ともなし〕▽**京の人はめづらかにや**　師中将の美男にて女のおもひかけたれどは　いはざる書ざま面白きにや〔せちに　師深切にの心也〕▽**中〳〵にこひに**　師「中〳〵に」はなまじゐにといはんがごとしうき恋になまじゐに死なで物思はんよりはの心也　一是は万葉十三の哥也　「桑子」はかいこをいへり〔天福　桑子　蚕也〕哥の心は　恋をして死なずして久しく物を思はんよりは。かいこになりてしばし有て死なばやとよめる也。「玉の緒ばかり」はしばしといふ心也〔玄そとの間也〕古今へしぬる命いきもやすると心見に玉のをばかりあはんといはなん。かいこは一年の中に死する物なればかくいへり　玄此哥万葉にあり。少かへていへり。

是亦作物語の故也　〽中〳〵に人とあらずは桑子にぞならましものを玉のを斗　師此哥のくはこにぞなるべかりけるとは。桑子は桑うちくひて何おもふ事もなげなれば。其さまをうらやみてよめるにや。田舎の女のかいこは手馴し物なれば也〔**ひなびたりける**　玄田舎めきし也〕〔**あはれとや**　玄業平の人をすてぬ心みえたり〕**▽夜ふかくいでにければ**　玄心とめんやうもなき歟。あくるをまたで出る也　末摘花の巻に。「何事につけてか御心もとまらん。夜ぶかく出給」と有　是より書也**▽夜もあけばきつに**　天福本ニ「東国之習家ヲクダト云。家鶏也云〻。」二「きつに」は狐也。「はめ」は食の字也。師狐此鳥をくはなんとの心也。「くだかけ」は玄家鶏也。たゞ「かけ」とばかりもよめり。〽里なかになくなるかけのよびたてゝいたくはなかぬかくれづまかも」。二「まだき」は速の字也。はやき心也。「せな」は夫也。庭鳥早く鳴て男をかへしつとうらむる也師　**▽くりはらのあれは**　師「あれは」「あねは」五音通おなじ事也。一奥州の所の名也。古今第二十東哥ニ〽をぐろさきみつのこ嶋の人ならば都のつとにいざといはましを」とあり。第一第二の句のかはれるばかり也。「つと」は裏也　都のみやげにと也　肖心はあねはの松を其人にたとへて。さそはるべき人ならば「いざ」といはまし物をといふ也玄同　**▽よろこぼひて**　一よろこびて也。都へつれてゆかばやといへるを女の悦べる也玄同義**▽おもひけらしとぞ**　肖男の思ひけるよと女のいひて悦たる也玄同義

【臆断】▽昔男…玉のをばかり　これは万葉第十二に「中々二人跡不在者桑子尓毛成益物乎玉之緒計」これをすこし作りかへたり。こひといふ心のは、あひみることをたのむ也。きもなければ、

に、神楽哥に「[illegible]」とあれば、かれがなく声を聞てやがておはせたる名なり。もろこしに、からすを鵠といふも、かれが声をもて名とせるにおなじ。「まだき」は日本紀は「豫」の字をよめり。此字を又は「あらかじめ」とも「かねて」ともよめり。皆同じ心なり。「せな」は夫を「せ」といふに「な」の字をそへたるなり。六帖に「夏のよの子もちがらすのさがぞかし夜深く鳴て君をやりつる」。**▽といへるに…まかるとて**　これは夜ぶかく出るに別をなげきて鶏をさへ狐にくはせてといへば、その心をなぐさめんとて、京へなんまかるゆゑに、とく帰るぞといひなして、下の哥をよめる歟。「まだき」といへるは、かれ、せちに思へるに、その後いつにても京へまかるとてはよめるといへる歟。**▽くりはらのあねはの…いはましを**　これは古今集第二十みちのく哥に「をくろざきみつの小嶋の人ならば都のつとにいざといはましを」といへるをかくひきかへたり。栗原は栗原郡の名なり。続日本紀云「神護景雲元年十一月乙巳置二陸奥国栗原郡一、本是伊治城也。」和名集云「栗原郡栗原。「あねはの松」はあねはと云所に高砂、武隈などのごとく名をいふ松の有けるなるべし。それと此女は上にいへるやうさだすぎたる女などにて、姉といふによせたる歟。「都のつと」は都への土産なり。万葉に「山づと」「浜づと」「道行づと」「家づと」などよめり。「裏」の字なり。俗にわらにて物などつゝめるを「つと」ゝいふ、此義なり。あねはの松を女にたとへて、さそはるべき人ならば「いざ」といはまし物をと上にはきかせて、下の心は女はゐなかびて心につかねばかへりて聞まゝにや。「人ならば」といへるをおもふべし。万葉第七に「玉津嶋みれどもあかせめて忘れんとおもふに、それも又かなはねば、中〳〵恋にもしなであるものならば桑子はふたごもりなどをもして、ちぎりふかきものなれば、玉のをのみじかきほどのしばしだにこの桑子とならばやとよめるなり。中〳〵に桑子にさへならばやといへるわたりせちに思へる心なん有けるといへるにかなへり。『淮南子』云「蚕食　而不飲二十二日而化」かく命みじかきものなれば、玉のをばかりといふもかなへり。**▽哥さへぞ…女**　所によるまじき「哥さへ」といふに人がらのひなびたる事はしられたり。「ひなびたる」は田舎めきたる也。「さすがにあはれとや思ひけん、いきてねにければ」は業平の人をすてぬ本性をかけり。夜ふかく出るは、心とめんやうもなければ、明るをまたで出るなり。源氏末摘花に「何事につけて御心もとまらん、夜ふかく出給ふ」。**▽夜もあけば…やりつる**　「きつ」はきつねの下略なり。万葉十六にも「刺名倍尓湯和可世子等櫟津乃檜橋従来評武狐尓安牟佐武」とよめり。「はめなで」はきつにくはせでといふ詞なり。下にも「かれなであまの」とよめり。竹取物語に「更に塩にぬれたる衣だにぬぎかへなでなん立まうできつ」、朗詠集「中〳〵に消ばきえなで埋火の有てかひなき物おもふみは」これにおなじ。「くだかけ」は東国のならひ、家を「くだ」といふといへり。元真集に物名に「からくだ物」をよめる哥に「こゆるぎの渚の風の吹しからくだものこさず波もよせけり」此「くだものこさず」は東の風俗によりて、あまのすむ家をいへるなるべし。「かけ」は家鶏なりと文字の音につきていふ説あれど、古事記には八千矛の御神の御哥「[illegible]

人はあねはの松の風なれやむかしの[illegible]」**▽といへりければ…いひをりける**　よろこびては女の悦なり。「思ひけらし」とは、われをふかくおもへばこそ都のつとになどはよみけるといひ居たる心なり。業平の下の心はかへりて松にあるをば聞しらぬなり。或説に「よろこぼひて」を田舎詞なりといへるはしからず。是は女の詞にあらず。記者の詞也。新拾遺集に花山院御製のなが歌にも「なには江に　いひつたへたる　ふるごとは　ながらのはしの　ながらへて　人をわたさん　かまへをし　たくみ出なん　ひだゝくみ　よろこぼしくは　おもへども云〻」、かげろふ日記云「年月はつもれとおもふやうにしあらぬ身をしなげくは、こゑあらたまるも、よろこぼしからず」、此「よろこぼしく」におなじ。たやすきを「たはやすく」などいへる類なり。

【童子】▽むかし男…かの女　童子問、「すゞろ」といふ詞を疑抄にこゝろならず也とあり。しからんや。答、さいひても義たがふべからず。「すゞろ」「そゞろ」同詞也。前に見えたるとおなじ。**▽中〳〵に…玉のをばかり**　童子問、此哥の注、疑抄に桑子、蚕也。恋といふものはあひ見る事をたのむに、さも侍らねばせめてしなんとおもふに、それもまた叶はぬ心なり。されば中〳〵に恋にしなであらば桑子にならばやといふなり。桑子は命一年を過ざる物なり。されども契のふかきものなればとり合せてかくねがふ也。此哥万葉集にあり。少替りて云り。是又作物語の故なり。万葉集に「中〳〵に人とあらずは桑子にぞならましものを玉のをばかり」。「玉のをばかり」はそとの間なり。「し

ぬる命いきもやすると心見に玉のをばかりあはんといはなん」「たらちねのおやのかふこのまゆごもりいぶせくも有かいもにあはずを（イ、せで）」とあり。此注いかゞ侍るや。答、此注用ゆるにたらず。哥の詞に不審をなさで注をかきたる物なれば邪説出来成べし。「こひにしなずは」といふ詞人情にあらず。哥の情にもあるべからず。哥は人情のまことをいひあらはしたる物なり。恋にしにたきといふ情、有情のものゝあるべき心にあらず。古哥の例もなきこと也。此哥も文字のあやまりを正さずして訓たがへたるより早有邪哥に注しなす成べし。此哥の本哥は万葉集第十二に有。印本の文字に「中中二人跡不在者桑子尓毛成益物乎玉之緒許」如此あるをかなづけに「ナカ〳〵ニヒトゝアラズハクハコニモナラマシモノヲタマノヲバカリ」如此よみ来れるかな付を万葉の本意と心得たがへるより此物語の作ごとになしたる哥をもよみあやまりて哥の意もあやまれるとみえたり。万葉集に「不在」の二字、「不有」の二字は死る古語なり。よりて「不在者」を「しなば」とよみて義通る哥おほし。この物がたりの哥も「不在」の二字をあやまりて「不死」の二字に書たるより「しなば」といふ詞を「しなずは」とよみあやまれると見えたり。それゆへに又文字の誤りを正さずして誤文字のまゝによみもし、義理をも付たり。注解には、あひ見ることをたのむにさも侍らねば責て死なんとおもふに、それも又叶はぬ心なりといへり。しなんとおもはゞ死やすき事なり。有情のものゝ心にもあらず。おしき命をもあふにかへたきとねがふ心は恋の通情ともいふべし。されば古哥に、恋にしにたきとねがふ事なし。かの万葉の中の哥をも解すして、此物がたりの哥解知べからず。

[illegible]

鶏也。鶏の鳴たる故に夜ふかく人の帰りしなり。鳴ずはしばしもとまるべきにといふ也。なきてかへせば夜明たらばきつねにはませんとなり。「くだかけ」は家鶏也。只「かけ」とばかりも読り。万葉集「里中に鳴なるかけのよびたてゝいたくはなかぬかくれづまかも」と有。此説可然しや。答、には鳥を「かけ」とばかりよむといふはしかり。「かけ」家鶏也といふ注は何とやらん。「か」は家と聞え、「け」は鶏と聞ゆる注と見ゆれば心違ひあるべし。万葉に「梅」のかなを「烏梅」と書たぐひに「かけ」のかなを「家鶏」とかくといはゞしかるべけれども、それも古風の字にあらず。ふるくは「家」は「け」のかなに用ゐて「か」のかなには用ゐず。此段の意は家のとりの事を家鶏といふ義に心得られたると見えたり。しからば甚誤りなり。家鶏故に「かけ」といふには非ず。鳴ごゑも「かけ」と聞ゆれば、とりの名を「かけ」とはいふ也。かゝとなく故にからすといひ、ちとなく故に千鳥といふがごとし。諸鳥おほくはなくこゑによりて名を付たる物なり。「くだかけ」といふは家の「かけ」といふ義ならばことはりたがふべからず。しかれども家を「くだ」といふ事古語の証例いまだ見あたらず。天福本に東国の習家を「くだ」といふとありても、其証見へざれば信用しがたし。或説に、東国にて家をくだといふ証は元真哥に「からくだ物」の名によめる「こゆるぎの渚の風の吹しからくだものこさず波のよせけり」これ海士の家を「くだ」とよめる証也といへり。しかれども此哥の「くだ」家とは聞えず。是は木につきてからといひ（イ、いひ、「くだ」と）云

万葉集学ばずしては此物語の哥をとくことかたかるべしといふ物なり。真名伊勢物語には「中〳〵」を「永ゝ」の字にかへてあれば万葉集にては「中〳〵に」の詞を此物がたりにては濁音に「長〳〵」とかへたるか。「哥さへぞひなびたる」といへるは、此五文字によりていへる歟。若義訓にて「永」の字を「ひたぶる」とよめば「永ゝ」の二字は「ひたぶるに」とよむべきか。万葉集の哥をとりかへて此物語作事にはなしたるものなり。されば此哥は「永ゝに恋ふるに死なば桑子にぞなるべかりける玉のをばかり」とよめると見えたり。「玉のを」魂によせて用ゐたる成べし。▽**哥さへぞひなびたりける** 童子問、疑抄に「ひなびたりける」田舎びたるなり。女の方より心をかけたるなり。心中相応じてゐ中めきたりと也。此説しかるべきや。答、心中相応じてゐ中めきたるとは、少心も違ふべし。「哥さへぞ」とあればその女の風儀いはずして田舎めきたる事をしらする文なるべし。是又物語の注なり。自注歟、後人の注歟。童子問、「ゐなかめき」といふ詞を「いなかび」「ひなび」といふはいかなる言ばにや。答、「び」の濁音伝ありて「ぶり」といふ詞をつゞめて「び」といふ也。ゐなかぶり、ひなぶり、同じ詞也。▽**さすがに…夜ふかく出にければ女** 童子問、疑抄に、さすがに哀とや、なり平の人をすてぬ心見えたり。「夜ふかく出にければ」心とめん様もなきか、明るをまたで出るなり。末摘花の巻に「何事につけて御心もとまる覧、夜ふかく出給ふ」と有。是より書出したりと有。可然や。答、此男をなり平と究めていへるは例の邪説也。其外はしかるべし。源氏物語すべて此物がたりの男を光源氏に作りかへて書たると見ゆれば、本歌作者の此説もうべ

まことゝいへんが為準拠したる説と聞ゆるなり。童子問、しかもば「くだかけ」といふ詞聞えず。家にあらずして此「くだ」をいかゞ心得むや。先生の賢案有や。答、予が僻案にはあらず。門人正辰が案に、くだかけは百済鶏成べしといへり。是正義なるべし。百済を「くだら」といふ古語相合へば、新羅・百済の鶏は本邦の鶏よりは大きにしてその形にくげなる物なり。武蔵に百済人あまた住居して百済といふ所も有。此物語の家にやしなへる鶏、百済鶏としられて田舎びたる風情も相叶へれば、正辰が案にしたがひて見れば義やすらかなり。しかれども是は今の世の人の案なれば、しひて是と定むべきにあらず。たゞ証記によりて古語は定むべければ家の事を「くだ」といふ明証あらば勘物にしたがふべし。童問、鶏のことを「かけ」といふ名は、「かけ」となくよりといへるも証哥ありや。千鳥の名の傍例にてさいへるや。答、明証あり。神楽哥にも「庭鳥かけろとなきぬ」といへる哥あり。童子問、「きつにはめなて」といふ詞にてきつにはませんといふ事になるにや。疑抄に夜明たらばきつねにはませんとなりとあれども、「なて」という詞の釈なければ心得がたし。いかゞ。答、「なて」（イ、はおほく哥によむ詞なれ共、「せん」といふ詞に）といふ詞に用ゐたる事なし。これは俗語俚語にさ用ゐる事あるか。いたく田舎びたる詞にせんとてさよみきたれる成べし。もし「なん」といふ草字「なて」（イ、はま）とあやまりたる歟。物語の哥は「なて」にはあるべからず。「はめなん（せん）」成べし。其証は真名伊勢物語に「四方開者木豆尓為食久宅鶏未尓鳴而背乎所遣」とあれば、哥は「はません」「くはせん」

にて有べし。「はません」も「はめなん」も同詞也。「はめ」は「はませ」の約言なれば、いづれにても義たがふべからず。「はめなて」は義たがふなり。「鶏」の一字を「かけ」といふ詞にあてゝ真名伊勢物語にかき給へるはよろしきなり。此哥の注に「哥さへぞひなびたる」と有たきものを、前の哥に、田舎びたるといふ注をかけるは注者の心ありてか、注のおき所たがへる歟。童子問、「まことに哥さへぞひなびたる」といふ注は此「きつにはめなん」の哥の注にあらまほしき事なり。しかるに注者もし心ありてかといへるは用捨有ての事か。こゝろありて前にかける説もありや。答、此哥は注にひなびたるといふまでもなく、おそろしきやうなる哥なれば前の桑子にもなるべかりけるといふところ、誠にひなぶりなれば右の注を書て「哥さへぞ」といひ「さへ」の義は此哥に心ざまもおもひやりなき田舎風にみせたるか。三更にも出行を鶏のなく音に起出て行と心得て、女のみづから田舎びたるに男の心もとまらざるかともしらざるいなかびたる心も顕はれたるなるべし。よりて前に哥のひなびたる注をかけるか、しるべからず。▽**といへるに…くりはらの…いはましを** 童問、疑抄に「をくろざきみつの小嶋の人ならばみやこのつとにいざといはましを」此哥をいひかへて作りたるなり。心は松をその人にたとへて云に人ならばといへる所重ね詞也。さそはれて行べき人ならば都のつとにさそはん物をと詞を添ていへば心得らるゝなり。また松のごとく主なき人ならば友なふ義も有べし。「つと」裏、土産なり。浜つと、山つとゝもよめりと有。此説しかるべしや。答、此説しかるべしとも覚えず。「をくろざき」の哥をいひかへて作りたるとあるはよろしからず。それは

栗原のあねはの松にかへたるは彼女をさして「あね」とよびたる意に引かへて作れる哥なるべし。此物語の作者の哥と見えたり。この物がたりには古哥を引かへて贈答をし、或は古哥によりて詞を作りて物がたりとしたれば、そこを作者の風骨としたると見えたり。且さそはれて行べき人ならばみやこのつとにさそはんものをと詞をすへているは心得らるゝとは非なり。詞をそへて哥を心得ればあしき哥といふ物なし。詞を添ずしてそのことはり明らかなるをこそよき哥とはするなれば詞を添ずして哥は聞べきものなり。此哥詞を添ずして作者の心明らか成べし。「人ならば」といふ言葉に此作物語の意趣あらはれたる成べし。かの女田舎びたれば、都の女にくらぶれば人にはあらず木石のたぐひにことならざる意をいはんとて、あねはの松にたとへていへると聞えたり。それをも知らず、かくいやしめてよめるをもかへりてわれを思ひけらしと悦べるを作物語の一興にはしたるものなるべし。▽**といへりければ…いひをりける** 童子問、疑抄に「よろこぼひて」は悦ぶなり。田舎詞なりと有、此注しかるべきや。答、是も田舎詞に「よろこぼひて」といふ所有歟しらず。ことさらに詞をひなびにせんとて後に書たるにや。たゞ「よろこびて」にても有べし。其証には真名伊勢物語には「悦而」とあれば「よろこぼひて」とはよまれず。童問、「思ひけらしとぞいひをりける」といふ注を疑抄には、「思ひけらし」はなり平のおぼし召けるよと女の言悦たるなり。東国の詞のさまなりと有。此注にては「おもひけらし」などゝいふにや。答、「けらし」といふは文選也。倍説には「けり」といふ

ふこと集中のべては「けらし」といふなり。東国の言葉にあり。**哥子問、「をくろざき」の哥は誰びとの哥にや。答、ふるき**みちのくの哥にて、作者はしれず。古今和哥集巻二十に入れり。**【古意】▽昔をとこみちのくにまですゞろにいたりにけり。…王城の人は…さてかの女** ことわりあきらけし。**▽なか〳〵に…死なずば…たまのをばかり** こは万葉に「中〻に人と有ずば人と成て不レ有者也。集中に「人となる事はかたきを」とよめるを思ふべし。」万葉に「不有者」てふ語二つあり。一は右の人とあらずば、又巻三の「讃レ酒哥」に「中々に人とあらずば酒壺になりにてしがも酒にしみなめ」是等は人となりてあらずば也。又一つは右に引たる「恋つゝあらずば死るまされり」、巻十に「秋はぎの上におきたる白露のけかもしなまし恋つゝあらずば」恋つゝ其かひのあらず也。なばてふ意也。此体多し。照し見るべし〉桑子にぞならまし物を玉の緒ばかり」てふ哥を少かへて恋に不レ死ばとは、同巻に「いつまでに生ん命ぞおほよそは恋つゝあらずば死ぬるまされり」此意にて、恋のならぬには死ばやとおもへど、中〳〵にしなずば桑子となりて雌雄二ごもりてもありぬべき物を、とても玉の緒ばかりみじかき命なるをといへり。さては二の句にあまり事多くこもりてわろかれど、此記者の作れるはかくのみむつかしきぞおほかる。能哥とおもふべからず。たゞ興に備ふるのみ。○「玉の緒ばかり」はすでに引たる「さぬらくは玉の緒ばかり」二云古今集にも玉の緒のみじかき事をよめり。されば是は短き命をいへり。蚕は淮南子に「食而不レ飲二十日而化」といひて、命みじかき物なれば合せてたとへ、旦雌雄まゆの内にこもりてあるをうらやみたる也。**▽哥さへぞひなびたりける** 女の田舎ぶりたるのみかは、よめる哥さへぞしかる

より也、已に「をくろざき」の哥は誰びとの哥にや。答、ふるきがしかしながらなる哥、すでにいへり〉源氏の末摘花に「何事につけてか御心もとまらん、夜ふかく出たまふ」と書り。こゝには心のとまらぬ事をいはでしらせたるが古文也。古文・今文のわかち、これらにて明らか也。○「夜ぶかく」は古本に「三更」と書たり。夜半の過にたるを云也。五更を暁とすれば、いとはやく出たるをしらせて書る也。**▽夜もあけば…はめなん…やりつる** 心のとまらぬ故にとはしらで、庭鳥のはやう鳴つるまゝに夫の帰りたりと思ひて、夜あけば雞を狐に喰せんと悪みていへるがをかしき也。六帖に「夏の夜の子持がらすのさがぞかし夜ぶかく鳴て君をやりつる」てふ哥を右の桑子てふ哥の体にいひなしてこゝの哥とせしならん。鶏はまづは五更のはじめに鳴なれば、「夜ふかく」てふに少そむけども、是は彼子もち烏の時となく鳴がごとく、雞の早鳴したるを男の幸ひとして出し心にていへるなるべし。古文は哥の心むつかしけれど、此記者のよめるは常しかり。○「きつ」は万葉に「さす鍋に湯わかせ子どもいざ行て相饗せん高橋の檜橋よりこん狐に浴さん」此哥は狐の声、河橋などさまざまの物をよみ入たる事左の注にみゆ。これにもきつねの「ね」を略して「きつ」とのみよめり。○「はめなん」は古本に「為食」と書たるにてしらる。今本に「はめなて」と有は「はめなん」の「ん」を「て」にあやまりし物也。万葉にあづま哥多かれど「はめなん」を「はめなて」てふ如くいへるはなし。あづま人とても五十の音の外に出たる言語はなき也。○「くだかけ」は百済雞ならんと我友興津正辰てふ人のいへる、実にかなへり。神代紀に「常世長鳴鳥」といへるも其はじめは他の国よりわたれる故なるべし。後にしやむ鶏、ちやぼ鶏などよべるも出たる所を名に呼をもて百済より渡れるを略して「くだ

かけ」と云事疑ひなし。且雞を「かけ」と云は神楽うたに「庭鳥はかけろとなきぬ」とうたへり。実に彼が鳴音は「かけろこう」となく故に名とせる也。すべて、からす、きゞしなどの名もなく声より出たり。〈ある説に、東国にて家を「くだ」といへば家鶏の義也と云は附会の説也。あづまにても家をくだといふ事なし。是はもし元真集に「からくだ物」をかくして「こゆぎ（ママ）の渚に風の吹しからくだものこさず波もよせけり」とよめる、此「くだ」を家の事と思ふにや。波もよせけりと有からは芥木づみなどをものこさず波と共によせくるとこそ聞ゆれ。又鶏の字の音にて家鶏を「かけ」と云と思へるも俗のわざ也。古事記に八千矛の神の哥に「家つ鳥かけはなき野つ鳥きゞしはとよむ」とあり。上古に字音なし。其後とても哥には字音をよまぬをあまりに愚なる説也。野つ鳥きゞしはきん〳〵と鳴より呼び、これは家の庭にをる鳥の「かけろ」となくよりしかよみたまふと思ふべし〉▽**といへるを…往（いぬ）とて** 此注を今本に「まかる」とあり。古本に「往」と書たれば「いぬ」とよむべし。京より他国へ行にこそまかるとはいへ、京へまかるてふ語やはある。「いぬ」は罷退の字の義にて、官よりしりぞくを云。又官人ならでも、京より田舎へゆき、或はあづまの都などより外へいぬるをもまかるといふべき也。後世の俗はいづこへ行をも「まかる」と覚えしは、云に足ず。▽**くり原のあねはの…いはまし** 姉波てふ所におもしろき松の有をもて、それめづるさまにいひなして、さて女の人がましくば都へいざなひてん物をといふ意をそへたり。其意は下の詞にて見ゆ。「いはましを」といはで、古本に「云倍」とのみ有は古哥の常也。古今集に「外のちりなん後ぞさかまし」てふ如し。「を」ゝ略せるにて味ひはある也。

今の哥は…

【新釈】▽むかし…かの女 みちのおくの国を「みちの国」といふは、はぶきすぎたることなれども、その比さやうにいひなれたるまゝにかけるなるべし。さてはるけきみちのおくまではゆくまじき身のゆくを「すゞろ」とはいへり。▽**なか〳〵に…玉のをばかり** 此哥の「恋にしなずは」と云意、師の詞の玉の緒と云書に、此たぐひの「ずは」は「んよりは」と解べしといはれたるにてよく聞えたり。一首の意は、なまじひに恋にしなんよりはかひこにぞなるべかりける、しばしのあひだ也ともといへる也。かひこはいのちみじかくても、め・を、ちぎりふかきものなるゆゑに、うらやみていへり。▽**哥さへぞひなびたりける** 「うたさへ」といひて、人がらのひなびたるをしらせたる文也。▽**さすがに…女** みなかびて心のおくれたる女をもさすがにあはれと思ふこそなさけふかく、よき人なれ。されど心のとまるべきにあらねば、夜ふかく出てかへる也。諸注に未摘花の巻をひき出たる、げによく似たり。こゝをおもひてぞ紫式部のかきつらん。▽**夜もあけば…はめなん…やりつる** 一首の意は、夜もあけなば狐にはましめなん、わろき庭鳥のいつも鳴時よりははやく鳴て夫をかへしやりつる事よといへる也。「くだかけ」の「くだ」はわろくいへる也と思ふより所は、奥義抄に「『くだ』はくづといへるにや。くづにはとりとよめるにや」とあるをはじめにて、都にて賀茂季鷹縣主も「腐かけ」にて庭鳥をわろくいへるならんといへり。「しこほとゝぎず（ママ）」のたぐひ也。宇治拾遺に「やすからぬ事こそあれ、物もおぼえぬくさりめにかなしういは伊治城（イヂくき）也」と見え、和名抄ニ「栗原郡」に「栗原（ノ）郷」あり。そこに姉波てふ地の名在つらん。今もあねは村てふありといへり。〇「つと」は万葉に裹の字を書たり。山づと、浜づと、道ゆきづと、旅づとなど云如く、其所につけたる物を何にてもつゝみて持来たる故の名なるを、此比となりては、かく人をいざなひかへるをしも「つと」ゝ云也。▽**といへりければ…おもひけりとぞいひをりける** 下つ心にはそしりて、人ならばといへるを、愚なる女にて、おもふ故にいへるとよろこべるをわらひてしか書る也。且「よろこぼひ」はよろこびを延て云のみ。

【よしや】▽くだかけ を百済鶏（くだらのかけどり）也といふ説は大かたの人諾（うべ）なふべし。或説に、東国（あづま）の方言（くにことば）に家を「くだ」と云歟、さらば家鶏（かけ）の義也といへるを翁はあづまにても家を「くだ」（ママ）といふ事なし。是は彼説の引哥に「こゆるぎの渚に風の吹しからくだも残さず波はよせけり」てふも、「くだ」は磯べの蜑が家などの事にあらず。「くた」とは芥（あくた）の上略也といはるれども共にいかにぞやおぼゆ。芥を「くた」とのみいひし例ありや。これは朽ばみたる沖津藻を朽藻（くだも）と云にはあらぬか。哥は香青（かあを）なるも朽ばみたるも渚に風の吹よせしからと云意ながら、こは「からくだ物」てふ名をかくしてよめれば、言に引れてさまではえことわりがたきは此類ひの哥に多し。朽るを「くだ」（ママ）と云は古言也。万葉に「卯の花くだしふる雨に」、又「くだみ山」を「朽網山」とかけり。▽**栗原のあねわの松の人ならば** 或説に、古今のみちのく哥に「をぐろ崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはまし」此哥をとりて少かへたる也といへり。松を人ならばといふ哥、日本武尊の御哥に「尾張にたゞに向かへる小津の嶋なる」

いひおこせき。いとめづらしき説にぞありける。又おなじ人のいひけるは、奥義抄に此哥の初句を「わがやどの」とあるは、そのかみさる本のありしにこそ。水槽を家ゝにするおきし例は、日本書紀皇極天皇巻に「毎レ門置二盛レ水舟一木釣数十一、以備二火災一」とありといへり。○「はめなん」真本にしたがふ。「はめなて」は「ん」を「て」にかきあやまれるなるべし。「はめなん」とかける古写本もありと信友いひおこせき。さるを臆断に「消はきえなで」と同じ事にとけるはたがへり。さやうならば此哥宵のまにきつよ、はみなで、とあるべき也。「夜もあけば」と云詞にも、「きつに」と云てにをはにも「はめ」と云詞にも、みなかなはぬときごとにぞありける。▽**といへるに男京へなんいぬるとて**「といへるに」とかけるは、といひて女はふかく思ひいれたるにと云意也。さるに男は心とまらねばふりすてゝ京へいぬるとて也。さてこゝはよく聞えたる文なるを、いかなれば契沖ほうしは思ひまどひけん、臆断の説いたく文意にそむけり。○「いぬる」真本にしたがふ。こゝは記者の詞なれば「まかる」とはいふまじきなり。「まかる」と云詞のことは消息文例上の巻二十五丁にくはしくしるしたるを見るべし。古意の説はわろし。▽**くり原のあねはの…いはましを**　みちのおくにての事なれば、その国の栗原郡のあねはと云所に名高き松のありけるをとり出て、その松が人ならば都人に見せまほしければ都への土産に「いざ」といひてさそひゆかましを、人ならぬゆゑにさもえせぬといふが哥のおもてにて、したには此女の人らしくはと云意をそへたり。臆断に「姉といふによせたり」といへるは例のくせなり。さることなし。▽**といへりければよろこびて思ひけり〳〵とぞいひをりける**「あねはの松」の哥のしたの意をばきゝしらでさそひていなまほしげにいへるをよろこびて、此男、我を思ひけり〳〵と云程にいひをりける也。ゐなかびたる女のかく心のおくれたるに、かる〴〵しくさし出て哥よみがちに我ぼめするは、よにくちをしききはにぞありける。かゝる女のしわざをもいへるは次の段のようにあるなるべし。かゝる女のしわざをもいへるは次の段のようにあるなるべし。かゝる女のさまをいとゞおかしく見せんとて也。○「思ひけり〳〵」塗本にしたがふ。「けらし」は「けり〳〵」をうつしあやまれる也。かなのかたちよく似たり。

むかし、みちのくにゝて、なでうことなき人のめに

かよひけるに、あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

しのぶ山しのびてかよふ道も哉
人の心のおくも見るべく

女、かぎりなくめでたしとおもへど、さるさがなきえびすこゝろを見ては、いかゞはせんは。

訳

昔、陸奥の国において、なんという取り柄もない人の妻に通っていましたのに、どうも不思議に、そんな陸奥の国というごく田舎で、つまらない男の妻としてあってよいような女、というふうにも見えませんでしたので、

あの陸奥の信夫山は、その山の奥まで見られるように通う道でもあったらよいが——その信夫山みたいなあなた、人目を忍んで通う道でもあったらよいのになあ、あなたのお心の奥まで見届けられるように——

女は、（この歌のよさがわかって）限りなくすてきで、申し分ない方だと思ったが、そんな根性の悪い蝦夷人の本性を男が見てとったなら、まあどうしょう、もう全くおしまいだわ。

校

①むかし—昔〔静・東〕・昔男〔塗〕。②ゝて—**へいきありきけるに**〔塗〕。③め—**むすめ**〔塗〕。④あやしう—あやしく〔塗〕。⑤女とも—をんなに**は**〔塗〕。⑥見えければ—みゑけれは〔塗〕。⑦しのふ山—忍山〔静・塗〕。⑧道も哉—みちもかな〔静・東・塗〕。⑨人—ひと〔静・東〕。⑩心のおく—こゝろのをく〔塗〕。⑪見る—みる〔塗〕。⑫女—をんな〔塗〕。⑬おもへと—思へと〔東〕。⑭えひすこゝろ—えひす心〔東〕・ゑひす**所**〔塗〕。⑮を見ては—**にて**〔塗〕。⑯せん**は**—せむは〔静〕・せむ〔塗〕。

釈

◇**なでうことなき人**　「なでう」は正しくは「なでふ」。「なにといふ」の約で、疑問・反語、打消などの表現と呼応して用いられる。当時、和歌には用いられぬ話し言葉用語で、伊勢物語中ではここの1例のみ。蜻蛉日記の地の文中の用例6例すべてが「なでふこと…（なし）」の型になるまでは、「なでふ」は比較的自由な型で用いられている。